

過日、某家のご法事にお参りした際、『ご住職、門徒は「門徒ものしらず」というのだから、何も知らなくてもよいのですね。』と真剣なまなざしで問いかけられた事がありました。今号はこの問題について、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

ご存知のように浄土真宗では聴聞を大切にします。聴聞とは私の問いを仏法に聞き、正しく学び、味わいとる事でありますので、その課程では色々な事を知らされます。それでは何故、「門徒ものしらず」というのでしょうか。

それは仏法を聞けば聞くほど、知れば知るほど、今までは気づかなかったみ教えのぬくもりが、肌を感じ安心（アンジン）の世界が開かれるからです。次第に迷信や縁起かつぎをしていた自分の愚かさを知らされ、真の道理を自覚した時、「私は何も知りません」という言葉をはき出させるのです。私は知りませんという言葉は、絶対の信心の裏返しと解するべきで、無関心 無学者という意味ではないのです。

真の「モノシラズ人」になりたいものです。